現在進行形のカネミ油症

50年前死去の子　へその緒に希望託し

記録映画、京都シネマで公開

　1968年に西日本一帯で発生した「カネミ油症事件」をテーマにしたドキュメンタリー映画「母と子の絆　カネミ油症の真実」が8日から京都市下京区の京都シネマで公開される。

息子への思いを語る岩村定子さん
（映画「母と子の絆」より）

　作中に登場する岩村定子さんは18歳の時に症状が現れ、5年後に産んだ長男を生後4カ月で亡くした。「母体を通して油症が影響したのではないか」と心を痛め、真相を知りたいと願っている。監督・プロデューサーの稲塚秀孝さんは「今なお後遺症に苦しむ人がいて、認定をめぐる争いもある。現在進行形の問題であることを伝えたい」と語る。

　カネミ油症事件は、福岡県北九州市のカネミ倉庫が製造した米ぬか油にダイオキシン類が混入したために発生した。全身の吹き出物や手足の痛みなど、さまざまな症状を数万人が訴えたが、ダイオキシン類の血中濃度などの基準によって未認定の患者も多数いる。

作品について語る稲塚監督
（京都市中京区）

　稲塚さんは患者や家族、医師など約40人に取材を重ねた。独自の認定基準を作って患者を分断させた国や医療機関の初期対応の誤り、和解で訴訟を終わらせたことによる仮払金の返還負担、現在に至るまでのカネミ倉庫の不十分な対応、など数々の課題が浮かび上がる。「それぞれの立場で、応分の責任がある」と稲塚さんは訴える。

　岩村さんの長男満広さんはチアノーゼや心臓異常などの疾患があり、1973年にわずか4カ月でこの世を去った。「なぜ亡くなったのか。お墓に報告してあげたい」と50年越しの思いを胸に、わずかに残された「へその緒」の検査に希望を託した。

　つい最近、その検査結果が分かり、ダイオキシンが検出されたという。稲塚さんは「今後、分析が進めば光明が見えてくる。多くの人は終わった事件という認識かもしれないが、半世紀以上たった今も解決していない」と語る。

　京都シネマでの公開は21日まで。（阿部秀俊）

©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます